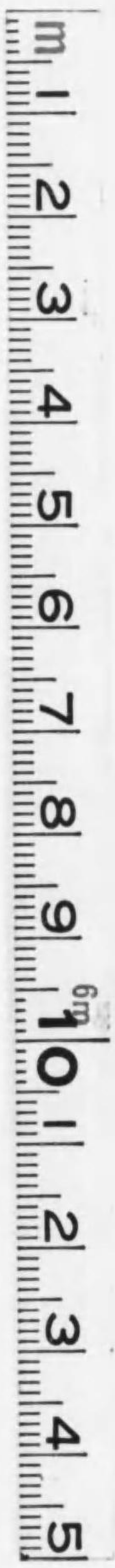


特253

638

木幡派
祖跡

願行寺誌



始



特253
638

木幡山花の錦はをりてけり

やなぎ櫻をたてぬきにして

堀川右大臣

霧がくれの彌陀由來 (願行寺本意)



雲々々々の飛鳥由來 (彌子寺本堂)

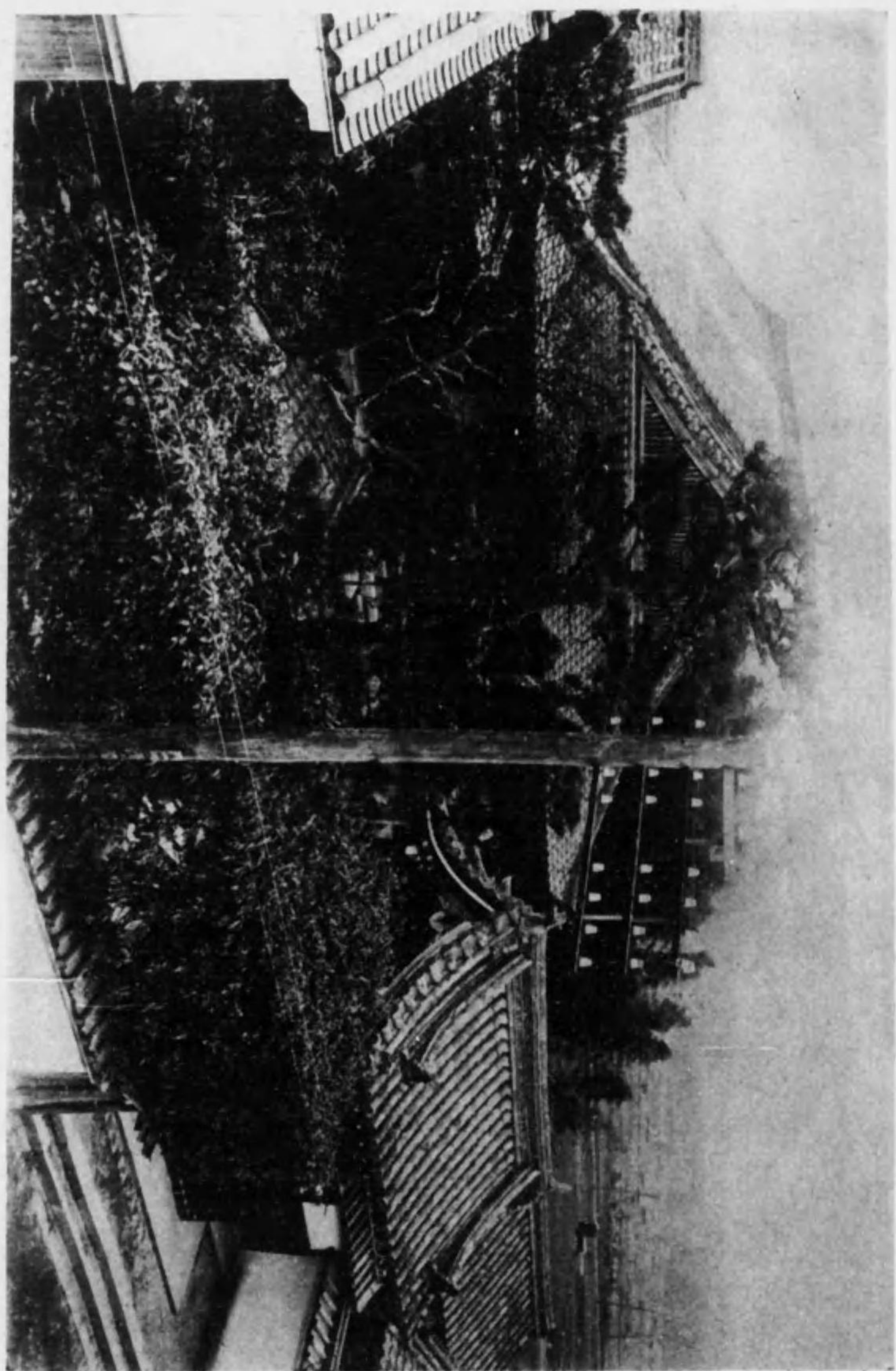
木幡版祖慧心良空上人壽像

(願行寺藏)



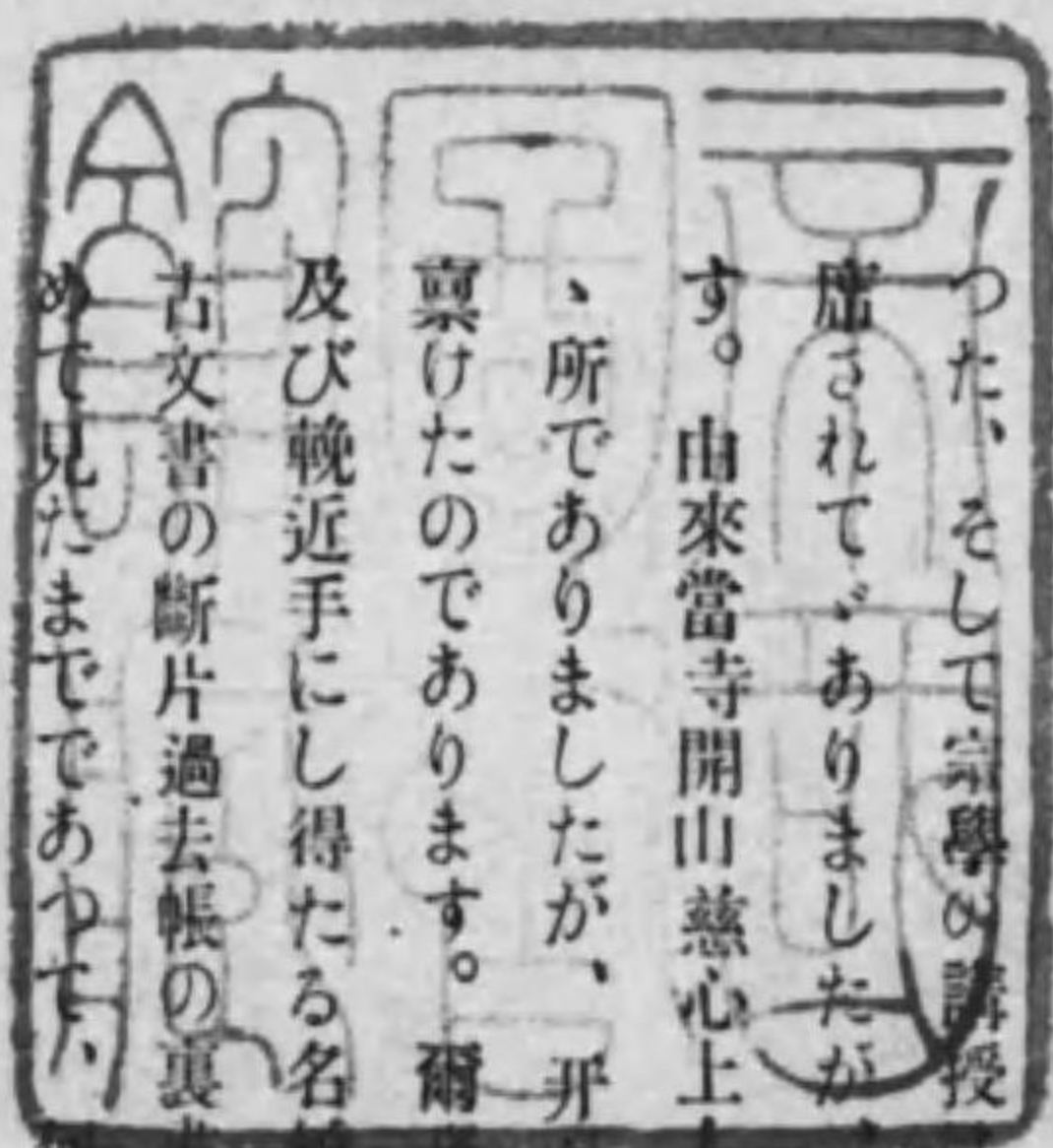
木彫彌師慧心真空弘人壽翁 (願行寺藏)

雲勝山願光寺全景



魯觀山顛於卷全景

はしがき



當寺を會場に充て、近畿寺院のために教學講習會が開催されたのは、去る大正十三年十一月であつた、そして宗學の講授は佛教専門學校の岸信宏師三長覺靜師なきの擔當で、福原教務所長も勿論臨座されてありましたが、談適々、淨土宗四流六派の隨一である當寺開山のこゝに及んだのであります。由來當寺開山慈心上人の姓氏及び入門年代が、宗史上不明に屬するこゝは何れの講師も一致する所でありましたが、開が第一資料として何等かを發表すべきは當寺董職者の責なるべしこの徳運を裏けたのであります。爾來當寺の緣起、二祖三代已後の傳統系譜、大檀那なりし清水家松尾家の系譜及び輓近手にし得たる名越派の傳書月形の函等を索搜し、その他地域の變遷伽藍の消長并に世代等は古文書の斷片過去帳の裏書等から索拾したもので、判らぬものを判らぬ儘に局所まで肉迫したいと努めて見たまでであつた。何等新規な貢獻があるふとも思へません。けれどもこの蕪雜な資料から大方諸先輩の無盡の蘊蓄が幾分でも傾け得るヒントともなる事が出来れば、何よりの幸福であります。

昭和二年七月八日開山上人祥忌日

尊勝山慈心院願行寺第四十九世

高 志 順 應 謹 誌



目次

第一位 位置

第二位 濫觴

定慧寺觀音寺、清海曼茶羅寺木幡山

第三位 開基慈心良空

慈心寺清水家、慈心寺廻心、慈心上人一宗の法統、慈心の性格及述作、慈心の門下

第四 沿革

南都北嶺寺尊勝寺淨妙寺、本尊の由來

第五 中興已後

寺號改稱、願行寺寺松尾家、洪鐘寺本堂庫裡寺立關、近代の施設

第六 境内諸堂宇

讚岐院寺木幡不動、濱の藥師、觀音堂

木幡流祖願行寺史

第一位 位置

當寺は京洛の東南宇治郡宇治村宇木幡に在り、關西線木幡驛から西二丁、京阪電車木幡停留所の東一丁、まことに新文明交通機關の要衝に當り、往古より宇治銘茶の生産地であり、品質、香氣、水色、他の追隨を許さぬといふ奥床しき土徳に恵まれて以て其名がある。西を望めば遠く八幡の森、粟生、吉峰を糺糊として一脈の連山に霞み、近くは巨椋の池、宇治川の清流を指呼の間に眺め、北の方 明治大帝の鎮まられます桃山の御陵は佛の眉間頂相の如く山紫の間に南面し給ふを拜す。而して東部一帯は喜撰山、木幡山、翠巒連綿として千古の緑を滴らす、宇治はよいと西北晴れて、東山風をよくと茶の芽摘む娘の鄙歌が恰もその全幅を物語るものゝ如くであります。現時宇治と言へば久世郡宇治町であります、けれども歴史(延喜式等)宇治といへば概して木幡邊を指したものであつて、現に菟道雅郎子の皇子の如きは木幡に生れ木幡に生育されたも

の、如くであります。要するに往古より藤原鎌倉時代までは、奈良平安の新舊兩都を綴る唯一の要衝であり、中にも天智天皇の滋賀遷都時代の如きは、一層樞要な陸路なりしならん、故に此世を我世とぞ思ふ望月の、かけたることのなしと思へばと、一世の豪奢を極めた御堂關白藤原道長父子が、本村に別業を営みて風月を翫びしより察すれば、當地の山川には幾多の歴史が刻まれ、一握の土塊にも千古様々の愛憎が含まれて居るものと思はねばならぬ。さあれ當寺は、淨土宗第三祖念阿良忠記主門下の六哲の隨一、慈心良空上人開創入寂の靈地にして、木幡流儀の祖跡、木幡山尊勝寺として一宗教學の上宗史上忘るべからざる靈刹であります。

宇治の茶山に箒はいらぬ、茶摘娘が袖ではく。

わしとお前は江戸ゆき茶壺、仲のよいは人知らぬ。

第二 濫觴

白鳳時代、それは光明皇后や南都法隆寺玉虫の厨子等を聯想しますが、當寺は、人皇三十九代天智天皇六年三月の創建で、彼の白鳳に先つこと數年即ち滋賀遷都に際し、國家平安寶祚延長の叡願に醜り、山階寺(後に南都興福寺となる)の僧定慧神圓菩薩の開創にかゝり往古は木幡山觀音寺と申しました。

僧定慧は俗姓藤原氏、彼の内大臣鎌足公の長子である。母は車持國子の女であり、始め孝徳天皇の中宮となり既に懷妊されましたが、天皇妃を鎌子に賜ひて宣はく、産む所の子男兒なれば卿が子とせよ、女子なれば朕が子とせんと、そして産れたのが玉の如き男兒であつた。幼名真人まひと、長じて聰明學流るゝが如く、入唐の僧慧穩に就て薙髮し、名を定慧と更め三論を學習す。

孝徳天皇の白雉四年、定慧道昭等と俱に唐に航し長安慧日寺の僧神泰に師事して、戒律法相を學習すること十有三年、天智天皇の即位四年歸東して山階寺に住みました、同六年の春、大和の國飛鳥の宮を廢して都を近江の滋賀に遷し給ふ事あり、則ち勅を奉じ

て木幡山の麓に一字を創建して木幡山觀音教院と稱し、法相三論兼學の蘭若わんじやくとしました序で、天智天皇八年、嚴父大織冠鎌足公薨じ、廟塔を大和の國多武峰に興し、唐の清涼山寶地院に擬して十三層の寶塔を建てられたが、爾後當寺に住し、和銅七年六月壽八十二歳で入寂されました、遺骸を木幡山に荼毘し、墳塋を營みて開山第一世となし、寺は南都興福寺の末流となつた。而して後數度兵火の災する所となり、燒失すと縁起にありませんがその再興のことを記されてありませぬ。

☒

大織官記(一條兼長選)

定賢和尚(鎌足)實ハ天萬豐日天皇(孝德)御子、墳所ハ山城木幡寺ノ邊ナリ云々

今一つの傳説、(清海曼荼羅と木幡山)

人皇六十六代一條院の頃、南都興福寺に清海上人といふかあり常陸の人でありましたが、「生身の佛を肉眼で拜みたい」それが燃ゆるが如き信仰の彼が唯一の白熱せる祈願で

あつた。衆生行を起し口常に佛を稱すれば佛之を聽きたまい、身常に佛を敬禮すれば佛則ち之を見たまひ、心常に佛を憶念すれば佛乃ち之を知りたまふ、精進潔濟一心不亂、日ねもす夜もすがら焼香禮念し奉るその香煙の裡に、化佛數多ましまして聲に應じて念々に近づき給ふを拜した。アナ尊とやと眼を開き見しに急ちかき消ぬ給へり、上人悲しきことに思い更らに想を籠め、高聲念佛して淨信心の手を延べ給へば、三寸ばかりの佛體が上人の御手に留まり給ひしといふ。斯んな奇特な事があつてから、毎年八月六日から一七日間南都七大寺を始め、遠近の僧俗集つて不斷念佛永く退轉せずと申すことでもあります。

かゝる高德なりし故にや正暦年中上人の夢に、笈を負い草鞋脚腫の旅装たびすがたの僧顯れて曰く、予は平城帝の皇子眞如法親王と申すもの、澆末の世彌陀の念佛に過ぎたる利益はない、予念佛堂建立の志淺からざりしも入唐渡天の思で遂に其意を得ず、予が寺は法華寺と西大寺の中間にある超昇寺といふのであるが、此寺に念佛三昧を興し永く一行三昧の道場とせられたいと、斯んな靈夢を感じた上人は早速西の京超昇寺に移り、まづ林泉浴池を整へ益々一行三昧に入り更らに發願して曰く、「願くは凡夫の肉眼で極樂の莊嚴が拜

みたい」と、乃ち蓮糸を蒐めて衣絹を整へ、北の方平安の都に然るべき繪師を索めんと、絹地を携へて木幡山の麓を過ぎ給ふに、白髪の老翁に行き會つた。

翁あなたが南都の清海上人ですナ

海……………

翁南都にも北京にも開んな立派な繪師はありませんよ!

海……………

翁私が描いてあげましょ、卿の志が貴いから!

翁明日の今の刻を俟つてお出で!

この尊とそくな白髪童顔の老翁は、絹を請け取つて北へ行くよと見わて消れて了つた。

上人は歡喜して辻の小御堂に籠り居て、一夜高聲念佛した、山神木魂して法益に潤ひ、野禽走獸も亦念名の聲を聞き、一佛淨土の結縁となつて夜もすがら丹誠祈願した、處が翌日になり恰度時刻違はず彼の老翁來りて一舗の曼茶羅を堂外の松か枝に懸けて曰く、これが卿が欣求する無漏莊嚴の淨土である、微細甚々で、人は得て描けるものではない!

上人隨喜渴仰泪を押へて問ひ給はく、翁は何處より來り亦何處の人ぞやと、翁曰く、私は清水寺の方に住む者である、常に來り給ふべし亦値ひ奉るべしとて、往方を知らずなつて了つた。

されば清水寺の觀世音にて在すよとて、この房舎に清水の觀音を勸請して念佛の道場となす、この希蹟があつてから木幡に念佛の聲が盛になつた、これが當地に於ける稱名念佛の濫觴であります、そしてこの曼茶羅は清海曼茶羅と稱して日本三曼茶羅の隨一であつて、中尊は宮殿の内に在り、中臺三十七尊、華池寶樓諸尊肩を並べ膝を交て、威儀蕩々、尊容魏々としてまことに尊いものであります、

かくて當寺は創草以來南都興福寺の末流を汲み、木幡の庄も亦安德帝の養和年中から南都興福寺の所領に屬し、大和官務公椿井越前の守譜代の臣、清水勝宗は代々その下司職として木幡の關守を掌つたといふことであります。

無量寶交絡、羅網編虛空、中略、本邦清水、觀音大士、授ニ與ス海師ニ之曼茶羅空中ノ圖相、符ニ

合ニ此說ニ、尤以足ニ仰信スニ耳、(無量壽經隨聞講錄四)

木幡山、高峰の北にあたる山なり、或は關山といふ、昔木幡の關この山にありし故なり、高峰とは

黄檗より東にあたる山をいふぞ(名所都島)

第三 開基慈心上人

八

四條天皇の歴仁元年、木幡の庄の關守清水勝宗は香華寺一字を建立して、淨土宗第三祖記主門下の高足慈心良空上人を招聘して住持とならしめた。

上人は、當寺に在つて無量壽經を講し、彌陀本願の妙旨を傳へて西方を指南す、道名日に高く德澤四方に布き、他力の宗風漸く薰し道俗群參して踵を繼ぐに至つた、時に當庄の官領椿井越前守懷榮、深く上人の德望に感じ大檀那となり、清水家を補佐して更らに造營に努め、輪奐の美稍や整ひしかば、宗旨を更めて、木幡流儀念佛門の根元道場となし、木幡山慈心院尊勝寺と號するに至つた。

清水勝宗は更らに家弟を出家せしめて慈心上人の門に入れ、別に子院一字を建て、之に住持せしむ、尊勝寺第二代慈阿上人といふ方であります、然るに慈阿、幾年ならずして師に先ちて早逝せしかば、改めて己が二男良阿上人を出家せしめて慈心上人に投せしめた、清水家は更に一字を建立して地藏寺と稱し、その弟の子を入寺せしめて之に居らしむ慈空上人と申しました、次て清水家は善願寺を建て、心阿上人を居らしめ、又道樂

寺を開きて聖慧上人を住持たらしむ、斯くして、當山の二、三、四、五の四代の住職は悉く清水家の家系でない方は一人もない、是は専ら開祖慈心上人の感化德望の然らしめたのであるが、亦偏に他力念佛の威力とも言へよふ。開山慈心上人の俗姓審ならずとも、如上のごとき密接な關係が代々清水家と聯綿せるより察すれば、其間淺からざる緣由の伏在せるものありしやを想像するに難くはない

慈心と廻心

而して之と略ぼ時代を隔てざる嘉禎三年の頃、木幡觀音寺に真空廻心といひ自ら中觀と號せし三論宗の學者があつた、若齡にして醍醐寺に入り、後に大悲菩薩が南都興福寺に律場を開くに當り、自ら往いて律の滿分戒を受け、勝願院の良遍(勝願院は興福寺の子院なり)と共に大に師の道化を扶け、後に聖一國師が東福寺に宗鏡錄を講するに方つて、亦良遍と共に往いて之を聽いたことがあつたとすれば、真空と良遍とは大悲菩薩并に聖一國師の會下に於て、同門の法兄弟たりしは明了な事實と言はねばならぬ。

九

而して浄土の第三祖記主良忠上人が、この良遍の門下であつて、後年師徳を追慕して鴻の巣に勝願寺を建立し、又良忠の良の字が良遍を思へるものとして察すれば、當寺開山の慈心良空が廻心真空の弟子か或は同一人であつて、記主か鎮西に趣かれて二祖上人から浄土教の傳燈寫瓶を稟げらるゝに先つて、既に南都京洛で多少の面識があつたことは疑ふべくもありません。而してこの廻心真空は晩年六十四歳で、鎌倉に聘せられて無量壽院を董し、翌年文永五年七月八日入寂せしより察すれば、その門弟と見ゆる慈心良空が鎌倉に往來して、記主良忠上人の門に投じて念佛門に歸せし緣由の、随つて濃厚なりしを察することも出来る。

當寺開山慈心上人は、斯の如くにしてその俗姓不明なると共に、三祖記主への入門年代も亦明瞭を缺いて居る。或は文永八九年の頃一條派の祖禮阿念空上人と俱に鎌倉に下つたといひ、或は文永十一年まで受學三年といふ如き記載もあり、何れも確實なりとは證し難い、但しその翌々の歲建治二年に當り、慈心と禮阿の屈請に依り、記主禪師鎌倉より入洛して、弘安九年まで在京十一ヶ年、この秋鎌倉に歸東せられて、翌十年の六月八十八歳にして三祖の入滅せられたのは確な事實であります。

⊗

律師諱真空字迴心號中觀、京兆人出藤原氏、衣笠亞相定親之孫少將定能之子也中略、於戒壇院講三論玄義、又歸木幡、八幡禪尼以所居之亭、更爲覺場、中略、爲木幡義一開三木幡觀音院所著有二往生論註鈔云々(續々肆書十一唐招提寺千歲傳記中)

⊗

この八幡禪尼とは石清水八幡の因縁により清水家との關係あるものならんか

⊗

尊勝守開山慈心良空は衣笠大納言定親卿之孫云々と(名勝誌)

智光曰等者、小幡回心房、義也、此人本三論宗、通世、後歸淨土宗、立諸行本願、義、專修行人也(傳通記見聞、一)

慈心上人と一宗の法統

三條派の開祖、望西樓道光の著無量壽經鈔の跋文に
先師和上^三有^三嗣法^ノ上足^一、諱^ハ良空、

と尤も尊崇した第一敬語で記載されてあるのは當寺開山慈心良空上人を指したもので、最初は明に一宗傳持の正統後繼者に擬せられ、先師記主上人の親任特に他と異なるものがあつたのであります。然るに斯く附法傳衣を受け了つてから、文永七或は八年の頃、良曉上人寂惠の入室せらるゝに當り、三祖の鐘愛し給ふところ眞に人間愛の至微なるものがあつた、風は梢に鳴り情は人に動く、その家系を尋るに寂惠上人は恩師三祖の家弟にして、骨肉の間實に血族の然らしむるものあり、慈心上人その心緒精刻にして渾然たる人間道の修行者として黙視するに忍びざるものあり、加ふるに墳墓の地、宇治木幡にありては、菟道稚郎子皇子の謙讓三歳に及べる史實に鑑み、且は惠公の徳望才幹、社中に傑出せるを想ひ、遂に恩師に請ふて曩に附屬されたる法器及び傳衣を返呈し、慧公を以て更めて淨土一宗正脈の嫡弟となし第四祖に擬せられしものなりといふことでもあります。

☒

然阿御在世ニ利根ノ人ハ多シ、但シ不レ依ニ根ノ利鈍ニ、乘圓ハ智慧廣博ナレモ志淺シ、慈心ハ鈍根ナレモ志深キ人也、依レ之有ニ上人面授口決一、此時慈心申サク云々(妙中抄)

慈心上人の性格并に述作

名越傳書明中抄に曰く

在世ノ提婆ハ利ニ而墜ニ阿鼻ニ、榮特ハ鈍ニ而證ニ果ヲ、又我朝然阿御弟子乘圓ハ利根ニ志淺ク、慈心ハ鈍而志深キ、如シ彼ノ榮特ニ

と記載せるより見れば開山慈心良空上人の人格性狀躍如として蔽ふべからざるものがある、即ち上人は潑刺たる洪才あつて意氣天を衝く才幹の器ではなく、温厚篤實、頗る謙讓醇朴の美德を備へ、その著作に至ても筆を下せば章をなし言を發せば論をなすの人ではなかつた。故に自ら執筆されたるは希にして多くは他に懲通して、僅に思望を達成されたるものが多い様である。就中、東宗要と稱する一部五卷は、一條派の祖禮阿上人と謗り、傳通記等の鈔記より要文を抜萃編纂して師の校閱を請ひしものなりといひ、或は弘安の頃三祖が京都大覺寺に在錫十ヶ年の間に、慈心並に禮阿の請に應じて滅後の邪義に備へんがために相傳の正義を口授されしを、慈心が筆録したものなりといひ、異説があります。要するに上人が東宗要述作に密接な關係ありしことは諍ふ餘地がありません。

此宗要者、乃於二京都一慈心上人所ニ執筆ス也、是ヲ以テ關東ノ性眞寂慧ノ二上人者更ニ無ニ依用ス

(諸記類聚)

正應元年戊子の春であつた、木幡の慈心上人三條の望西樓に道光上人を訪れて曰く、先師の鈔記し給ふところ在世の間に皆整足せり、唯闕くる所は大經の鈔のみである、故に御在世中親しく稟承せる輩は披閱するに聞からずと雖も、未學の者は或は一宗の義路に迷はん、冀くば師傳を鈔記して末聞の徒を資助せられたいと、頻りに請はれたが道光上人固く辭して領はざること七ケ年、永仁三年更に請はるゝには、まづ草記すべし治定に於ては一門の者會合して取捨すべしとて、懇望兩月の間にこの責四度にも及んだといふことである。道光上人遂に免るゝことを得ず、漸くその四月から筆を起し翌年の正月十三日に功を畢ることが出事た、因つて五月二日から慈心上人を始め一條派の禮阿、並に道光上人と三師鼎立して、精しく論義治定されたのが、彼の無量壽經の鈔一部七卷となつたのであります。

又

正應元年十二月十八日清書之一

と奥書されたる然阿良忠記主上人傳も、矢張り木幡の慈心上人の懇囑で、道光上人が筆録されたといふことが、その跋文に明記さるゝ處であります。

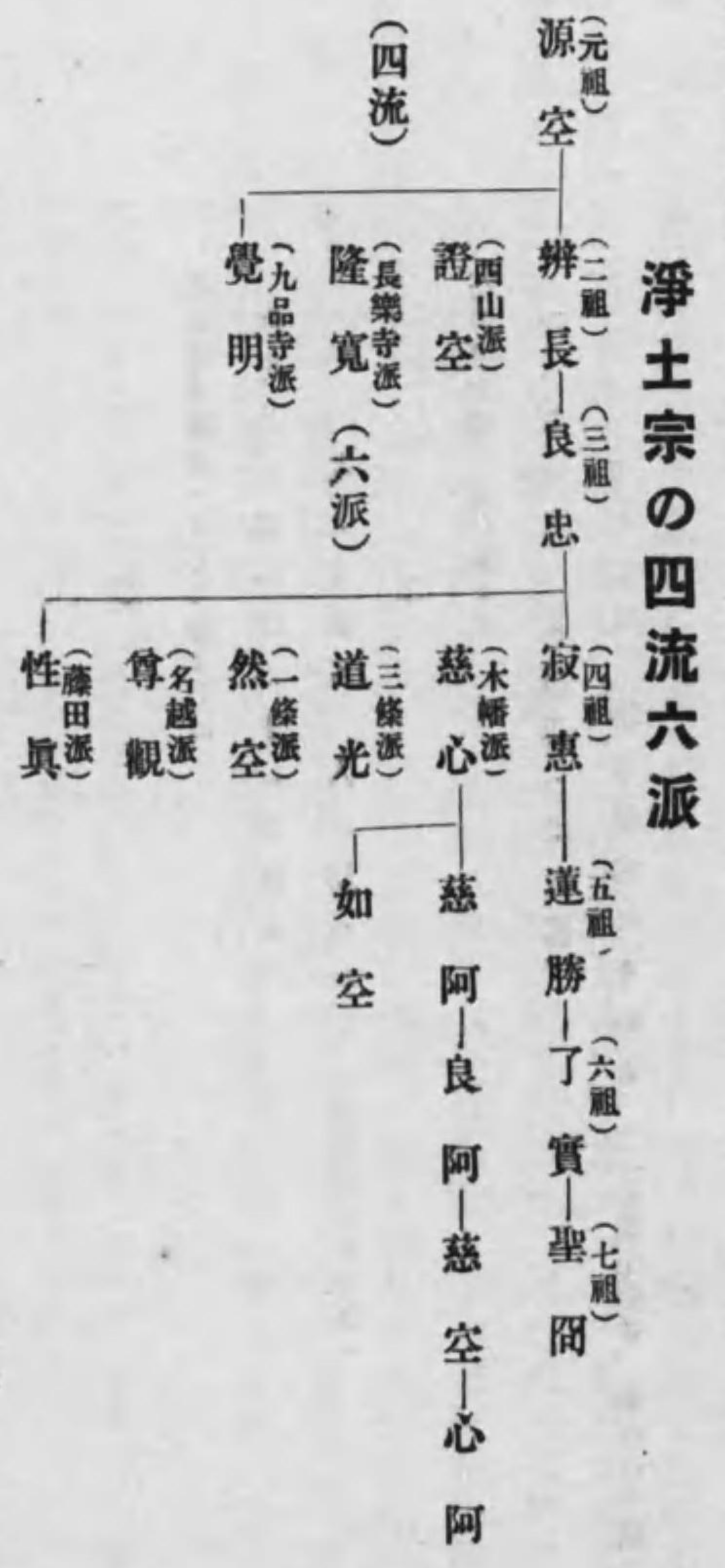
かくして其すぐ翌年永仁五年丁酉七月八日に、開山慈心良空上人は壽七十七歳で御遷化になりました、嗚呼悲いかな金鳥西に没して法燈忽ちに滅した、けれども上人の懇囑によつて世に残された大經鈔一部七卷、東宗要一部五卷は、萬代不壞の燈炬として永く世道人心を照して居ります。今現に當地附近が黄檗宗の如き大本山を拗しながら禪風は一向に奮はず、而も地方人一般の信仰が概して淨土一宗に統一せる事實を見ても、上人の餘澤が七百年の今日尙赫々たるものが残存すると言ふてもよい、而して上人の廟塔は當願行寺に存し、壽像は莊麗な厨子に納まつて、佛殿の別檀に安置されて居ります、拜するに頂骨高く秀で、頬肉豊かに、額廣からずして頗る謙讓醇厚の美德が自ら其相好に現はれてる様であります、(口繪参照)

開山 慈心上人良空大和尚、
大和官領越前刺史懷榮大居士 尊儀

慈心上人の門下

上人の門下として名を一世に止めたのは、先づ第一に如空上人を擧げねばならぬ、京兆の人で姓は大江氏、童名法喜丸、始め南禪寺に入りて儒典を學び、父没するに及び大に世の無常を感じ、先づ道意の許に於て出家し、尋て慈心上人に謁して諸宗の奥義を研鑽し一宗の玄微を盡す、後醍醐天皇師を招して諸部を勅問し給ふ奏對頗る明なり、天皇即ち佛元眞應智慧如一國師の號並に柴衣を賜ひ、知恩院第九代、知恩寺第六世に列す。
其他當山二世慈阿上人、第三代良阿上人、地藏寺開祖慈空、善願寺開祖心阿上人等何れも木幡關守清水家一門の出にして、大概當寺末山の開祖であることは前に記した通りであります。

因みに浄土宗第三祖記主門下の六派と稱するは、第一には正脉の後繼鎌倉の光明寺白篋寂慧良曉上人次に藤田派の性心上人、名越派の尊觀上人、以上を關東の三派と呼び、三條派の道光上人(今は檀王法林寺)一條派の禮阿上人(今は大本山清淨華院)及木幡派の慈心上人を加へて、之を關西の三派と稱して居ります、今これを圖示せば



花の頃木幡寺へまゐり侍りしに

我ためと思ふばかりに山里の

花より後も 人の訪へかし、(僧頼阿續草庵集)

☒

花の頃木幡に住み侍りて

かへるべき 家路思へは山櫻、

ことしは 宿の軒端にそみる。(二品親王覺譽、新續古今集)

第四 沿革

開山慈心良空上人の滅後、慈阿、良阿、慈空の三代を経て當寺子院善願寺の開基心阿上人の世延慶二年己酉の八月であつたが、比叡山延慶寺の僧徒法衣に兵杖を帶し、日吉権現の神輿を擔いて蜂起して京洛に亂入したことがありました。朝廷は激を南都の僧兵に發して憑みて之が鎮撫に當らしむと聞き、山門の衆徒何ぞ黙すべき、由來木幡の庄は南都興福寺の所領であり、當寺も亦興福寺の未流であつた因縁から、山門の衆徒忽ち當村に亂入し、まづ民家を襲ふて火を放ち、尊勝寺淨妙寺の兩伽藍には南都北嶺の僧兵が相對侍して陣を曳いた。これがためにさしにも清淨な佛地が攸ち阿鼻叫喚の修羅の巷と變した。この時、木幡の關守清水三郎を始め六地藏の住人、同族石具入道覺淨等、奮然蹶起して防ぎ戦つたが、衆寡敵せず同八月十三日遂に焼失烏有に歸し焦土と化して了つた

☒

延慶二年七月十二日興福寺の大衆懇狀前の解文と相違す、仍て返し送らる。中略、寺の侍法師等來り申して云く、大衆只今木幡山大谷と云ふ所に參着す云々(御堂關白御記)

山徒五六十人ひた兜なるが、大衆の中より走抜て楯二十帖つかせて、尊勝寺の焼跡の一段高き所に打上り云々(太平記)

それより十六年を經る正中元年甲子、當寺子院道樂寺の祖聖慧上人の代に至り、ある日、大和官領椿井房政公尊勝寺の斷滅せる礎石を見て、撫然として嘆して曰く、位萬人を御し、生産せずして衣食窮することなし、これ而しながら祖先の餘澤、我もし彌陀慈父の教法に浴せさりせば豪顔以て民に當り、祖先、佛祖、及び百姓の恩を忘れしならん予が今日あるは編に佛祖の慈光に浴すればなり、二つなき、ものと思ひし水底に、山の端ならで出づる月影、何ぞ月影を宿すべき房舎なからんやと、乃ち工を起し尊勝寺を現の地に移して一字を建立す。蓋し舊地域は里老呼んで觀音寺敷と稱して現在は關西線木幡停車場の東數歩にあつて地名を存す、その高橋と稱するは、舊境域を圍れる溪流に架した橋梁の名で、尊勝寺の門前を渡せしものならんか。

椿井寺殿四品全月懷樹大德(椿井大和侍從房政公)

家集

尊勝寺にて人々戀歌よみ侍りしに

我戀を、さてやわすると思へども

起ても侘し、ねてもさへなし、

春ははや、木幡の關の朝ぼらけ

都のたつみ、やゝかすみぬる、

本尊の由來

爾後、世代を閱すること五代、星霜を經ること凡そ一百餘年、當寺第十一代乘譽上人在住の頃應仁年間、洛中洛外天下大亂し當寺又亦兵火に罹り祝融子の災する所となり、堂宇悉皆烏有に歸す。三年を經て文明二年庚寅兎も角一小堂宇を興し、八月十九日入佛慶讚の式を擧ぐ、而してその本尊は靈夢に醜りて伊勢の國鈴鹿山より迎へた尊像で「霧かくれの彌陀」と稱し、現に今本尊として奉安せる立像三尺の御影でありまして、明治の初

年内務省囑、九鬼男爵から美術参考の鑑査状を附せられて在ります、拜するに雄大圓滿なもの、如く、柔かさと強さを抱擁した黒い底光のする尊い御姿で、拜者の魂を溶さねば置かぬ力がある、御胸の前に開かれた左右の御手、どろッとした軟かな光、それは大慈悲の涙が露となつて瞬くのでは無らふか、アノ僅に見開き給へる御眼に、無限の慈悲と、智慧と、威厳とが力強く浮び出て居る底ひ知られぬ魅力には、何人と雖自ら肅然たらざるを得ぬものがあります。

里老の口牌に據れば、寺門再興のため寺壇力を戮はせ、拮据精勵、愈々上棟の式も擧げ終れる頃、住持乗譽上人は檀家の某々と同夜に同一の夢告を得た、相携へて伊勢の國鈴鹿山に到りしに、佛像を負ひ奉つる一介の通路に遇ふ、何地に趣き給ふやと問へば山城の國木幡の里に志すものなりと、且つ驚き且つ喜び、やがて本尊を授受し了れば、山雲籠め閉し、霧深ふして遂に其行衛を失ふ、定んで如來應具の化身ならんとて、愈々尊崇の念を深め、爾來「霧がくれの彌陀」と稱するに至つたと申し傳へて居る、當寺所藏にかゝる元録二年の文字ある古版木に曰く

天照大神御告にて鈴鹿山より光明出現、霧がくれの彌陀御厨子建立の儀、今度法界他力を以て成

就仕度候、御志の方々は、戒名俗名御厨子に書きつけ、二世安樂の御回向申すべきものなり。

元禄二己八月 日

木幡村 願 行 寺

因みに、この本尊と見紛ふほど殆ど酷似する古色蒼然たる彌陀三尺の立像が脇檀に祀られてある、往古の淨妙寺本尊と申し傳へ今は傳法佛として立せ給ふのでありますが、鈴鹿山に現の本尊を感得するまでの尊勝寺の本尊佛ならんか、惠心の作であります。

淨妙寺懷古 (空華集)

- 觀レ矩建レ寺 贖ニ黄城ニ 白舍朱門悉廢蕪
- 天意似羞千歲笑 木幡山畔露模糊

木幡村東北の山麓に大門の跡塔の壇等あり、又村民の葬所を淨めん寺と名く、之れ皆古趾なり、又村内なる願行寺の阿彌陀佛は、淨妙寺の古佛と申し傳ふ云々(名勝誌)

其の後一百年天正年間に至り、道運社深譽上人當寺第十九代を董職す、上人は俗姓清水氏 木幡の關守清水隱岐守勝政の三男である、幼にして江洲伊香立の新知恩院承譽上人の門に投して薙髮し、學德兼ね備はり道化大に振ふ、まづ管領椿井三河守定政を説きて大檀越となし、清水家一族を始め遠近諸檀の信根に培ひ、桁行七間、梁行七間の堂宇即ち現存の建物を興し、且つ思へらく、由來當寺は慈心良空の趾、木幡流祖として京洛の巽、卦疆の邊鄙に介在して一派の本寺を唱へ來りしと雖、兵燹災禍、屢々襲い來りて土木復興の資源まことに堪ゆべくもあらず、則、寺格を蔽ふて總本山知恩院の末寺に屬し往昔の寺號に擬して改めて尊勝山、慈心院、願行寺と稱しました、後、享和年中華頂山大僧正仰譽門主は向拜に「願行寺」の板額を賜ふた、これより以來、道運社深譽上人守慶大和尚を以て當寺中興の祖となし、椿井三河守定政、大照院殿覺翁散月大禪定門を以て大檀那と崇めて居ります。

松尾家の一統と願行寺

寺號を改稱してより後凡そ四十年第二十一代大譽上人に至り、元和元年の夏大坂落城す、その砌り豊臣の臣で伊勢の國桑名藩の幕下白粉しろこ、神戸かんべの餘黨あり、敗殘の一族郎從を卒ひ來りて當寺に入り、大譽上人の法衣に縫り、姓氏を隠し土着して歸農しました、後世松尾家五家の祖先是なりといふことであります。而しより以來、世は徳川の流れ清くして永く太平の御世を謳ひ、幕府を江戸に開きて代々の將軍淨土宗の大檀那ならざるはなく、江戸には芝の増上寺、小石川の傳通院を始め十八檀林の制を布き、京洛には知恩院を復興して三段の地域を擴らき、續いて由緒の寺院一として興隆の運を啓かさるものはなかつた、然るに獨り當寺は淨土宗四流六派の隨一木幡流祖として一宗に隠れなき由緒を持して、而も徳川幕府代々の恩顧に漏れ、頗る荒蕪萎微の色ありしを蔽ふべからず、けれども幸に松尾家一統は、子々孫々先祖の蒙れる恩顧を忘れず、五家擧つて協心戮力、幕府に代つて當寺の大檀那となり、内外の補翼頗る盡せるを以て幸にその餘喘を保つことが出來た、明治維新後の近代に在つては、却つてこれが寺門興隆の端を得たも

のかも計られない、現今、本堂内陣左方の柱に二三の刀痕が残つて居りますが、餘りに殺伐なるが故に隠蔽されてはあるものゝ實は元和年代三百餘年の名残を止むるものであります。

洪鐘新鑄、大營繕及び庫裡

當寺第三十四代を好譽上人といふ、洪鐘を新鑄し鐘樓堂を創建す現存するものであり鐘銘によれば延享四丁卯年三月十日、轉運社好譽上人愼阿無極玄察老和尚と、鐘樓堂の棟木には延享四丁卯年十一月日、大工棟梁六地藏の住人、飯田吉左衛尉藤原行長と記されてあります。

尊勝山願行寺鐘銘並序

山城州宇治郡木幡者古開山也。綴_レニ以_レ朝日横尾之秀_ヲ縁_スニ有_ニ塔島_ノ茶靡_之奇_ヲ。睇_ニ三室_ニ觀_ニ撰_ニ嶽_ニ名都隣_レ城郷聚相承_ヲ。况_ヤ穆_々速_々日柳神之靈祝舊_ク懷_ニ多福_ヲ以_ニ前民_ノ用_ヲ。蓋_シ城南_ノ勝梁山川_ノ幽致_矣。有_ニ精舍_ニ曰_ニ願行_ヲ。斯乃昔_ノ大導師慈心上人爲_ニ啓迹_ノ處_ニ。

是知擇而處_レ仁固在有道也。師_ハ吉水_ノ的流天照_ノ耿光_、分聯_ニ六家_之明燈_ニ散沃_ニ一方_之法雨_ヲ。蟠_英蓄_彦芳風_掩。諒_淨教_之蔚然盛乎本郡者實由_レ師始_{。今}住持無極察公志識_{賢明}。希蹤_ニ往軌_ニ支傾_飭蠹_不下_以遠近_ニ而易_其準_ヲ。一旦意謂_{。紺殿雖}古梵_放雖_昌而無_ニ華鯨_ノ純如_ト以_レ和_レ之非_レ缺_歟。遂_ニ華檀_{信鳩}工_範銅_桓之_ヲ。寺庭_ニ云々_{中略}。

延享四年_{丁卯}始洗十日東都比丘敬首謹識

當山三十四世住持沙門玄察募緣

當寺念佛講中並總檀那中助力

京城三條釜座住人

鳥工御鑄物師具鳥土佐

藤原定賢敬鑄

洪鐘々樓成就落慶して兩三年、寛延三年十一月三日、好譽玄察和尚遂に遷化し、高足潮譽玄海上人當寺第四十五世を董し、大に祖德を顯揚し、門廡の經營頗る備はる。然る

に當時は宇治川の汎濫すること一再ならず、年々水害を蒙つて堂宇大破に及べり、則ち時の庄屋茂右衛並に年寄彌兵衛等發起し、遠近の檀信徒相諮り境内の地上げ本堂の大改修を行ふ、日傭庄助に命じて先づ佛殿の總床を取拂ひ、四方の壁床下少し宛取り崩し、柱より柱に丸太を以て嚴重な根搦みを施し、さて一方より除々に跳ね上げては搗臼をかき込み、土砂を築き入れ、漸次築き上ぐる事凡そ三尺、この工事に際し本堂の北側にて擔先六尺を斬り縮め北側の押入外椽を略し、梁行六間桁行七間に改造することゝなりぬ而して創建以來柿葺板屋根なりしを更めて悉皆瓦葺となした、當時は一間に一間の玄關及び二坪の茶の間を以て僅に工事中の佛殿とし假堂に充てたといふことであります。

然るに斯の大營繕は、器械力の乏しき中古に在りては至極の難工事なりしものによ、着手して滿一ケ年夏去り秋訪れても工程進まず僧俗共に焦燥と沈鬱の日が續き内外頗る憂色があつた、遂にその羈絆に堪へざりけん、住職潮譽は極月二日の夜、何地へか韜晦出奔せられたものらしい、則ち癸酉極月三日の日付にて庄屋茂右衛門より松尾治右衛門に寄せた書状に見えて居ります。けれども同上人は明和五年戊子七月二十三日當寺にて入寂のこと明了なれば、そはたゞ一時の波瀾に過ぎず、寛延三年より寶歷年中を経て明和

五年に至る法臘約二十ケ年、可なりの永住と言はねばならぬ。

川霧の都のたつみ深ければそことも見えぬ宇治の山里(大江匠房)

庫裡の建立及び近代

本堂の地上げ改修より年代を閲すること九十七年、嘉永三年一月に起工し同年六月に至るまで、現存の庫裡並に客殿、横堅二棟を新築落慶す、大工は六兵衛とあり、當山總檀家一致協力の資であります、この大工事に際し、當寺開山慈心上人以來代々格別の縁由ありし清水家は、特に一寄建立として間口二間の大玄關を築造して寄與せられました現存のそれでありませ、當寺第四十四代 登蓮社最譽上人光阿源寶勝山和尚の董職中であり名古屋大森の大森寺より當寺に轉住された上人であります。

直く後代の一蓮社立譽上人は、五ヶ庄西導寺に出で、始め田原郷の誓光寺を董し、後

に當山四十五世を襲ふ、現存の表門及び左右十有餘間の築地は、實に上人の御代明治十八年の落慶であります、これもと黄檗山内、現の宇治村小學校の地眞光院にあり、大和の國郡山城主の建造なりと傳へ、惣樗造り莊麗雄大の四脚門であつて、附近希に見る輪奐の美を備ふ。當時、檜村京都府知事は社寺廢合の令を發し、當山未、地藏寺、往生寺、道樂寺、地藏院並に、其頃既に荒廢して取り毀たれありしと雖、善願寺、阿彌陀寺、清香庵の都合七ヶ寺を廢滅に歸せしむ、故に現今願行寺末としては、醍醐村小栗栖に西方寺一ヶ寺を残すと雖も、全く本末の意義を存して居りません。

第四十七代精譽達勇上人に及び、宗祖七百年御忌記念事業として明治四十四年、本堂の大營繕並に裏堂を改造して客殿二間を設け、上と下とに浴室を備へて五重相傳について授戒會を修行す、この工事には特に小栗栖西方寺檀徒來援して雜役に當れりといふ、當時の總代平岡瀧次郎氏には、その功積の偉大なるを旌表して特に院號を授與せり。

現住 心譽順應は始め宗命を奉して韓國開教の任にあたりて仁川寺に在り、歸朝の後伏見玄忠寺を董して高志姓を襲い、大正三年當寺に聘せられて第四十九代を繼ぐ、鐘樓

の北東西に土塀を築き、浴室便所を移轉改築す、倉庫一棟は素と郷倉なりしか、當寺境内に建られし緣由を以て之を其儘貰ひ受けて寺有となし、腐朽せる棟木を取替へ門牆稍や整へるに似たり。而して教線の維持には、總代三名の外に評議員十名を選出して願行寺協議會を組織し、教團には、婦人部、青年部、照心會あり、輓近淨土開宗七百五十年記念法要として、五重相傳を修してより以來、幾分教田に培ひたるが如くで微力今日に及んで居ります。

五重相傳を了へて

東西相對二尊前 九十餘人托一蓮
身與金仙分半座 唱名聲靜起香煙(靜古居士)

皆人の心に殘るみ光は

これそ眞の佛なりけり(あきら)

見る限り稻穂はたれてそここゝに

草のみ青くぬきんで、見ゆ、(鼎)

第六 境内諸堂宇

木幡不動

石彫三尺の立像で、もと木幡村小字庄中^{しょうなか}、阿彌陀寺の別堂に祀られてありましたが、明治十八年當寺境内に移管してから、方六尺の小御堂に更に一間の向拜を増築されてあります。その由來を尋ぬるに、保元元年の七月、崇徳上皇は踐祚のことから叡慮に叶はせ給はぬことがありました、保元の戦は恰も一睡の悪夢の如く敗れた、ために龍樓竹園の御身で遠く西海讃岐に配流の涙に咽び給ふたことがありました。

配所白峰の麓をめぐる谷川の水を掬はれては、岩に堰かれても復合して流れ行く山川に還御の春を偲ばせ給ひ、「われでも未^なに遇はんとぞ思ふ」と、血に啼く吐鵝の聲に寫經の筆をさしをき給ふては、都を戀ひ慕はれました、「濱千鳥、跡は都に通へども身は松山に音をのみぞ啼く」とものされたのも同じ想いであります。三年といふ長の月日を血を染むる思で、漸くに就されし五部の大乘經が、都に止めがたしとあつて送り還されて

了つてからは、爪をも剪らず、鬢髪をも伸ふるに任せて、口惜しき限りに物狂はせ給いたる姿で、遂に思ひ死に崩れさせ給ふたのであります。

この由を傳へ聞きたる平相國は、心いと平ならず、或夜の夢に、柿色衣に不動袈裟をかけ、齋甲に鎧着けなとせる數百騎が、西八條にある我館に讃岐の院を入れ奉らんとて既に木幡の關にかゝりしと見ましたからたまりません、入道相國狼狽して、これまた物狂はしく、魔軍退散のために、一夜に命して不動明王を祀つたといふことである、蓋し庄中^{しょうなか}とは、木幡の庄の中心の意味で、木幡の關所を眼前に見る處、爾來木幡不動と稱し來れるが即ちこれであります。

要するに不動明王は、彌陀慈父の奴僕三昧に住し、如來本願成就の曉には、大六天の魔王に使用すること七度に及び、大忿怒形を現して降魔歸佛の媒介をしたといふ因縁から除病、厄除けにまで祈願を凝す風を生じたのであります、従つて不動明王を禱つて、本師の彌陀を拜せぬことは必ず明王の本旨に叶ふものではない、故に庄中に在りし昔も、不動堂の外に、別に本尊の阿彌陀堂があつたことを忘れてはならぬ。毎年八月廿八日、三光廣丸組といふ講社があつて、大護摩を供養する年中行事がありますが畢竟は彌陀入信の大方便でありますよ。

薬師堂

不動堂と同じく、明治十八年に薬師院を廢して堂宇を境内に移したものの、往古より當山の末寺八ヶ寺中の隨一で、小宇中村にあつて瀧の薬師と稱し來つた方二間の小御堂であります。古來奈良街道を通じて京洛に入るものは、必ずこの薬師如來を拜して而して木幡の關にかゝつたもので、關所の手前に祀られて都に入る人々の驗疫の役目を、佛に負はせた昔の人の純な心が偲ばれて貴い。

観音堂

日本三曼荼の隨一である清海上人九品曼荼羅を、木幡山に感得し給ひし因縁から、清水寺の觀音を勸請して觀音寺と稱したといふことは、前に述べた處であります。木彫十一面の立像、御丈一尺八寸で、古來當寺の鎮守として祀れる一小堂宇であります。要するに是が、當山の淨土改宗已前に於ける唯一なる紀念の遺物であると想はねばなりません。

空華集

木幡山麓觀音寺、三月來遊興頗濃、憑伏詩人頗記取、八株花映三一株松一

又

觀音寺北淨妙寺、幽經春深少客過、一樹空庭花似雪、驚人春色不消多、

宇治はよいとこ茶は緑どころ

娘やリたや婿ほしや

寝たや眠たやねた夜はよかる

摘んで寝た夜はなほよかる。



昭和二年三月十日印刷 (非賣品)
編輯兼發行人 高志順
京都府宇治郡宇治村字木階
印刷人 松崎辰三郎
發行所 願行寺

終